

H16_ さいたま市における都市公園利用実態観察調査

調査項目 さいたま市における都市公園利用実態観察調査

調査年次 平成16年度(5次調査) 章番号〔 〕

目的

新たに加わったさいたま市について、平成12～13年度に実施した利用実態調査と同手法による観察調査および公園利用者ヒアリング調査を行い、利用状況や公園に対するニーズを把握する。

概要

都市公園が均質に配置された住宅地における近隣公園とその誘致圏内に位置する3つの街区公園での平日と休日の実態について、観察員による6～19時の連続観察調査を行い、集計・分析を行った。

結果

利用実態観察調査のまとめ

平日より休日の利用数の方が多い。

平日の利用内容は、「徒歩通過」「親子での遊び」「友達との遊び」「保育園等団体での遊び」の順に多く、休日は「親子での遊び」「友達との遊び」「犬の散歩」の順で多い。

対象地区の公園利用は全体として「親子」あるいは「子ども同士」の遊び利用が多い「公園らしい公園」ことが特徴といえる。

公園内に樹林地による起伏があり入り口が限定されることから通過利用が少ない点が目立つ。

複数の公園で同じ子どもを見かけることが多く公園を渡り歩いている利用者が多い。

利用属性は、全体的に男性が多い。これは、これまでの大都市調査の平均と同様の傾向。利用者の年齢層は、20歳代や中高生の割合が低く、小学生(特に低学年)や幼児利用の割合が非常に高い。

利用内容の公園種別での違いは、街区公園は「散歩」や「健康運動」がほとんどなく「通過」も近隣公園に比べると少ないが、「親子での遊び」や「保育園等団体での遊び」は街区公園の方が多い。

推定利用率は、通過利用を含めて平日は8.8%、休日は9.8%で、対象小学校区の住民の一日あたりの利用者は、平日およそ11人に1人、休日はおよそ10人に1人が身近な公園を利用していることとなる。これまでの大都市調査と比較するとやや低い「通過利用」が少ないこと、すぐ近くに人気のある井沼方公園があること、休日に学校を利用した球技活動が行われていることが要因としてあげられる。但し、幼児や小学生の推定利用率は高く、休日の小学生のおよそ2人に1人が身近な公園を利用していると考えられる。

結果に見る公園利用を考える上での留意点

公園におけるコミュニティ形成 子どもを核とした母親コミュニティの存在、ペット(犬)を核としたコミュニティの存在が確認された。単に利用というだけでなく公園のコミュニティ形成に犬などのペットの存在は無視できない。

高齢者の公園利用に対する遠慮 全般に高齢者の利用が少なく、平日午前中のグランドゴルフ利用も「使わせてもらう」という意識が見られた。健康運動器具も子どもの遊具代わりになっており、高齢者の利用はほとんどみられなかった。このような現象はまちの成熟とともに子どもの数が減り、次第に高齢者利用にシフトしていくことが予想されるが、市民の中にはまだ「子どものための公園」といった意識が強いことがうかがわれた。

課題

調査結果の反映等

調査項目 さいたま市における都市公園利用実態観察調査

調査年次 平成16年度(5次調査) 章番号〔 〕

キーワード

利用実態、観察調査、ヒアリング調査、身近公園、推定利用率

事例公園等

さいたま市 東浦和中央公園(東浦和第8公園)、赤堀公園(東浦和第一公園)、尾間木内谷公園(東浦和第四公園)、大北公園(東浦和第六公園)